

令和 4 年 5 月 27 日現在

機関番号：32606

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K02514

研究課題名(和文)シェイクスピア劇の小唄 テキストに埋め込まれた聴覚的連想イメージ・コード

研究課題名(英文)Vocal Songs in Shakespeare's dramas

研究代表者

中野 春夫(Nakano, Haruo)

学習院大学・文学部・教授

研究者番号：30198163

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：シェイクスピア劇の小唄は同時代の大衆歌謡文化の典型的な産物であり、シェイクスピア劇の小唄にはこの歌謡文化のコンヴェンションから生み出されたイメージの聴覚的連想コードが潜んでいる。本研究は近代初期の大衆歌謡文化がもつ特異性を指摘したうえで、この特異な文化との関連を接線としてシェイクスピア劇の小唄が果たしていた役割をとらえ直し、娯楽文化史の脈絡からシェイクスピア劇の特性を再検討する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究はシェイクスピア劇の小唄および同時代の歌謡文化に関する情報のさまざまな空白を埋め、演劇上演において小唄が本来に果たしていた役割を再確認した。先行研究の書誌学的成果がシェイクスピア劇に限られるため本研究も対象を限定したが、将来的にはエリザベス朝演劇全体を対象とする包括的な研究に発展しうる。本研究の成果で予想される直接的な意義は小唄の歌詞本来の意味を再現し新たな作品解釈を行うことができる点、さらにシェイクスピア劇テキストが関連する文化領域をエリザベス朝の大衆歌謡文化まで広げ、文学研究と文化史研究を具体的に接合する新たなアプローチ・モデルを提示できる点にある。

研究成果の概要(英文)：This project aims to make clear historical settings and cultural background for songs sung or alluded to in Shakespeare plays, focusing on their social implication. The project's final goal is to show that the popular songs of the age were deeply embedded in the texture of the dramatic language.

研究分野：近代初期イングランド文学研究

キーワード：シェイクスピア 小唄 バラッド ルネサンス歌謡文化

1. 研究開始当初の背景

シェイクスピア劇の小唄はおもに書誌学と音楽史の専門家によって分析される特殊な対象であり続けてきた。シェイクスピア劇の小唄に関する研究は 20 世紀後半期に飛躍的に発展し、John H. Long, *Shakespeare's Use of Music*, 3 vols. (1955, 1961, 1971) や P. J. Seng, *The Vocal Songs in the Plays of Shakespeare* (1967) などが小唄個々の書誌学的背景を明らかにした。現時点では R. W. Duffin, *Shakespeare's Songbook* (2004) が示すように、シェイクスピア劇のどの小唄で元歌(材源のバラッド)が判明しているのか、また小唄それぞれがどのような節回し(tune)で歌われたのかがほぼ解明されている。小唄の歌詞は書誌学と音楽史の研究対象として詳細に分析される一方、シェイクスピア劇の中で小唄が果たした役割が文学研究もしくは文化史の領域で系統的に検討されることは事実上なかった。シェイクスピア劇テキストの最も標準的なアーデン版でさえ、脚注等で元歌の存在に言及するようになるのはおおむね第 3 版(1995 年から刊行開始)からであり、しかもその情報内容も書誌学関連のものに限られている。

本研究の出発点は科研費基盤 C「16 世紀イングランド文学における浮浪者像の表象研究」(平成 26 年度～28 年度)にあり、『十二夜』の浮浪者表象を分析する過程でこの劇の小唄を調査したことから始まる。調査の結果『十二夜』の小唄のほとんどにバラッドの元歌が存在した事実が判明し、シェイクスピアは今日の舞台の音楽効果と同じく同時代のバラッド・ヒット曲を BGM として利用していた可能性が浮かび上がった。Seng や Duffin などの先行研究は『十二夜』の小唄が元歌の歌詞や設定、節回しを使用したことなど、シェイクスピア劇の小唄と同時代の大衆歌謡文化との関係の一端を明らかにしてはくれる。ただしどの先行研究もシェイクスピアが歌詞や状況の設定について独自の翻案をどのように行い、小唄が劇世界の中でどのような機能を果たしているのかという問題には不思議なほどに取り組んでこなかった。その結果、小唄と関連するシェイクスピア研究の領域には、いまだに情報の空白部が数多く残されている。

2. 研究の目的

本研究はシェイクスピア劇の小唄と同時代の大衆歌謡文化との関係を明確化するとともに、元歌のバラッドがシェイクスピアによってどのように変えられていたのか、その翻案化にも注目する。歌詞だけが商品となるバラッドでは識字率の関係(1600 年における男性の推定識字率は 40～60%、女性は約 10%)から男性が主要な購買層と想定されざるを得なかったことは理論上明らかである。本研究は元歌のバラッドが男性のための商品であったことを確認したうえで、もともと男性版の失恋怨み歌や男性向けの猥雑求愛唄、男性アウトローの愚痴小唄であったものがシェイクスピア劇では劇作品のテーマに合わせてどのようなものへと翻案されるのか、小唄の演劇ヴァージョンにおける翻案過程を網羅的に解明する。

1600 年頃の観客はシェイクスピア劇の小唄の歌詞にどう反応していたのか? 狂気にかかったオフィーリアが歌う小唄は今日の私たちにとって意味不明であるが、シェイクスピア時代の観客にもそうだったのか? 近年ではシェイクスピア劇上演・受容の歴史的变化に注目する研究の比重が高まりつつある一方、比較の基準点となるシェイクスピア時代における上演と受容の

特性がいまだに明らかでない領域が存在する。その典型的な例がテキストに組み込まれた小唄である。

本研究の特色および意義は受容史、上演史研究において物差しの原点となる情報、すなわちシェイクスピア劇が娯楽の一形態として持つ特性を同時代の娯楽文化との関連から具体的に説明できる点にある。本研究はシェイクスピア劇の小唄および同時代の歌謡文化に関する情報のさまざまな空白を埋め、演劇上演において小唄が本来的に果たしていた役割を再確認する。先行研究の書誌学的成果がシェイクスピア劇に限られるため本研究も今回の申請にあたっては対象を限定するが、将来的にはエリザベス朝演劇全体を対象とする包括的な研究に発展しうる。本研究の成果で予想される直接的な意義は小唄の歌詞本来の意味を再現し新たな作品解釈を行うことができる点、さらにシェイクスピア劇テキストが関連する文化領域をエリザベス朝の大衆歌謡文化まで広げ、文学研究と文化史研究を具体的に接合する新たなアプローチ・モデルを提示できる点にある。

3. 研究の方法

エリザベス朝社会の大衆歌謡文化には今日の常識があてはまらないことが多々あり、その一つが節回し(メロディー)に著作権がなく、誰でも自由に使える娯楽産業の共有財産であったことである。バラッド作者が新曲を作るさいにはある特定の節回しを選び、その節回しに合うように歌詞を作成した。ロンドンの街角でバラッド売りによって売られる印刷バラッドには歌詞だけが印刷され、「～の節回しで歌え(sing to the tune of～)」という但し書きが必ずつけられているのもこの特殊な事情による。この現象はシェイクスピア時代の歌謡文化では、誰もが知っているともみなせる代表的な節回しが相当数存在していたことを示唆している。本研究が注目するのはシェイクスピアが小唄の節回しを選ぶさい、「柳の歌(Willow)」や「いとしい口 robin(Bonny Sweet Robin)」、「ベドラム乞食(Tom a Bedlam)」など同時代に何度も刷り直され、観客にとって歌詞がなじみであったであろうバラッドの大ヒット曲メロディーを使う傾向が強かったことである。

シェイクスピア劇小唄研究の先駆者である P. J. Seng によればシェイクスピア劇テキストに歌詞が組み込まれている小唄は 70 曲存在し、その他にも研究者の間で数値の違いはあるが、タイトルもしくは歌詞の断片だけが言及されるものが 50～80 曲存在する。音楽史研究の成果によってシェイクスピア劇に関する限り大多数の曲で節回しが判明しており、現時点の概算で約 30 種類の節回しが確認できる。本研究はそれぞれの節回しが娯楽産業で独自の連想イメージ・コードを発展させていた現象に注目する。日本の娯楽産業の場合、「柳」は未婚女性の怨み、深夜のお濠端、幽霊を連想させるのが怪談以来の約束事であるけれども、16 世紀・17 世紀のイングランド大衆歌謡文化では「柳の唄」の節回しによって未婚男性の怨恨、目の前の冷たい小川、男性の入水自殺が連想される特異な聴覚的イメージ・コードが発展していた。シェイクスピア劇の観客たちは劇世界の中で小唄の節回しが奏でられるたびに今日の私たちでは想像できないさまざまなイメージを連想していたはずなのである。本研究の課題の一つは文字化されないシェイク

スピア時代の大衆の不安・恐怖・欲望を再現することであり、聴覚的な情報としてテキストに潜在的に存在する連想イメージ・コードを約 30 種類と推定される節回しごとに指摘していく。

本研究はシェイクスピア劇の小唄と同時代の大衆歌謡文化との関係を明確化するとともに、元歌のバラッドがシェイクスピアによってどのように変えられていたのか、その翻案化にも注目する。歌詞だけが商品となるバラッドでは識字率の関係（1600 年における男性の推定識字率は 40～60%、女性は約 10%）から男性が主要な購買層と想定されざるを得なかったことは理論上明らかである。本研究は元歌のバラッドが男性のための商品であったことを確認したうえで、もともと男性版の失恋怨み歌や男性向けの猥雑求愛唄、男性アウトローの愚痴小唄であったものがシェイクスピア劇では劇作品のテーマに合わせてどのようなものへと翻案されるのか、小唄の演劇ヴァージョンにおける翻案過程を網羅的に解明する。

4. 研究成果

本研究はシェイクスピア劇の小唄に関する従来の一連の書誌学情報 (J.H.Long(1955,1961,1971),F.W.Sternfield(1963),P.J.Seng(1967),J.M.Ward(1992),R.Duffin(2004),D.Lindley(2006))を整理し、シェイクスピア劇の小唄に関し元歌の有無の点検と節回しの特定化の作業を行った。そのさい本研究は P.J.Seng のように分析対象の小唄を歌詞が掲載されているものに限定せず、『十二夜』の「三人の陽気な男たち(Three Merry Men)」のようにタイトルだけが言及され、歌詞は収録されていないものの舞台上で歌われていた可能性がある曲も含めて検討した。本研究は(1)元歌関連の分析、(2)商品としてのバラッド、(3)エリザベス朝イングランド社会の諸制度を背景としたシェイクスピア小唄の歌詞の再検討、の 3 分野に分けて調査・分析を行った。

(1)の成果は論文「シェイクスピア劇の小唄とコンヴェンション」、『学習院大学文学部研究年報』第 64 号、pp.181-213、2018 年 3 月、である。同論文は『十二夜』のフェステ、『リア王』の道化、『オセロウ』のデズデモナ、『冬物語』のオートリカスによって歌われる小唄を対象として、彼らが歌う曲が娯楽産業の芝居小屋において実際にどのような役割を果たしていたのか、これまでよく知られてこなかった小唄の特性とコンヴェンション(約束事)を明らかにしつつ、演劇上演の中で果たしていた小唄の役割を明確にした。

(2)の成果は論文「シェイクスピア・ビジネスの誕生—ジェイコブ・トンソンとニコラス・ロウ編集版テキスト(1709年)」、『学習院大学文学部研究年報』第 66 号、pp.15-43、2020 年 3 月、である。シェイクスピア全集最初の編集版テキストであるニコラス・ロウ編集版を紹介し、この版において小唄がどのように組み込まれ、読まれるコンテンツとしてどのような役割を果たしていたかを分析した。

(3)の成果は論文「魔女の小唄—『マクベス』の挿入歌」、『学習院大学文学部研究年報』第 65 号、pp.15-43、2019 年 3 月、である。『マクベス』に登場する魔女は「三人の魔女」だけではなく、劇の中盤である第 3 幕第 5 場になると突如彼女たちの「女主人(mistress)」と称するヘカテが加わる。さらにそのヘカテを彼女の「ちいさな霊(little spirit)」が舞台奥で小唄を歌い、

合流するよう誘いだす—「舞台奥から歌が聞こえる。『こっちへおいで、こっちへおいで、などなど』(*Sing within*. 'Come away, come away, etc)」(3.5.35.SD)。さらにまた、第4幕第1場では「三人の魔女」とは別の魔女三人組がヘカテとともに登場し、舞台上で小唄を歌って退場する。本論文は、同時代の魔女論および魔女裁判を甲羅的に調査し、『マクベス』における魔女の特性を明らかにしつつ、魔女たちが歌う小唄の娯楽コンテンツとしてユニークな特徴を分析した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 中野春夫	4. 巻 第68号
2. 論文標題 『リチャード2世』、大衆劇場版の娯楽性	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『学習院大学文学部研究年報』	6. 最初と最後の頁 25-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中野春夫	4. 巻 第67号
2. 論文標題 「シェイクスピア劇と売春産業」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『学習院大学文学部研究年報』	6. 最初と最後の頁 105 126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中野春夫	4. 巻 18号
2. 論文標題 エリザベス朝演劇のレビュー 『魔女』の娯楽性の生成」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『人文』（学習院大学人文科学研究科紀要）	6. 最初と最後の頁 39-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中野春夫	4. 巻 66号
2. 論文標題 シェイクスピア・ビジネスの誕生 ジェイコブ・トンソンとニコラス・ロウ編集版テキスト（1709年）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『研究年報』（学習院大学文学部紀要）	6. 最初と最後の頁 53-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中野春夫	4. 巻 第64号
2. 論文標題 魔女の小唄 『マクベス』の挿入歌	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 学習院大学文学部年報	6. 最初と最後の頁 181 - 213
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中野春夫	4. 巻 64
2. 論文標題 シェイクスピア劇の小唄とコンヴェンション	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 学習院大学文学部研究年報	6. 最初と最後の頁 181-213
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中野春夫	4. 巻 16
2. 論文標題 シェイクスピア歴史劇と1590年代の重税	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 学習院大学人文科学研究所 『人文』	6. 最初と最後の頁 63-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中野春夫	4. 巻 63
2. 論文標題 オフィーリアの小唄ーエリザベス朝イングランド社会の女性版恨み歌	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 学習院大学文学部研究年報	6. 最初と最後の頁 123-152
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 中野春夫
2. 発表標題 シェイクスピア劇とファン・カルチャー
3. 学会等名 日本シェイクスピア協会第59回全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中野春夫
2. 発表標題 ニコラス・ロウ編集テキスト（1709年）とシェイクスピア・ビジネス
3. 学会等名 日本シェイクスピア協会第58回全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中野春夫
2. 発表標題 魔女たちの小唄
3. 学会等名 基盤B「娯楽文化」科研プロジェクト第1回研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中野春夫
2. 発表標題 シェイクスピア劇と娯楽風俗文化
3. 学会等名 日本シェイクスピア協会第57回全国大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------